

26.91 であり、CT では肺血栓塞栓症が認められた。

2 つ目の症例は 69 歳女性、2010/5/31 に交通事故にて受傷、左足関節脱臼骨折の診断で入院となった。入院時の D-dimer は 7.98 であった。徒手整復、シーネ固定し入院、後日手術予定となった。6/11 腰椎麻酔後エスマルヒ、ターニケット使用後に意識消失、徐脈、血圧低下。D-dimer は 40.00 であり、造影 CT では肺血栓塞栓症が認められた。t-PA 静注開始し PCPS 導入、低体温療法など行うも 6/14 に心拍停止、死亡確認となった。

9. 長期臥床により深部静脈血栓症を合併したと思われる大腿骨近位部骨折の 2 例

野仲 聡志, 佐藤 貴久, 武智 泰彦
角田 和彦, 高岸 憲二

(群馬大院・医・整形外科)

【はじめに】今回我々は、術前までの長期臥床により深部静脈血栓症 (以下 DVT) を合併した大腿骨近位部骨折 2 例を経験したので報告する。【症例 1】84 歳女性。現病歴：2011 年 4 月 2 日、転倒し受傷。自宅にて安静臥床して経過観察していたが、左股関節痛が改善しないため、4 月 21 日、近医受診。レントゲン上、左大腿骨転子部骨折と診断され、加療目的にて 4 月 22 日、当科紹介受診となった。初診時現症は、左大腿部、両側下腿部に腫脹を認め、両側 Homans 徴候陽性であった。血液検査上、D-ダイマー、炎症反応は高値であった。造影 CT 上、両側ヒラメ筋内に静脈血栓を認めた。入院時より低分子ヘパリンを皮下注射し、4 月 27 日、観血的整復固定術を施行した。【症例 2】58 歳男性。現病歴：2011 年 1 月 24 日、転倒し受傷。2 月 4 日、当科初診。レントゲン上、明らかな骨傷認められず経過観察していたが、6 月 16 日、左股関節痛が増強してきたため近医受診。レントゲン上、左大腿骨頸部内側骨折を認め、6 月 17 日、当科紹介受診となった。初診時現症は熱発、左股関節痛を認め、血液検査上、D-ダイマー、炎症反応は高値であった。手術待機中、造影 CT 上、左総腸骨静脈に血栓を認め、抗凝固療法を施行。7 月 20 日、下大静脈フィルター挿入後、左人工骨頭置換術を施行した。【考察】今回、術前までの長期臥床により遠位型、近位型 DVT をそれぞれ合併した大腿骨近位部骨折 2 例を経験した。いずれも術前に抗凝固療法を行い、PTE になることはなかったが、DVT が疑われれば、早期治療が重要であると思われた。

10. 当院における大腿骨近位部骨折患者の下脈静脈血栓症の術前スクリーニング検査についての報告

安藤 貴俊, 森本 和典, 須藤 執道

信太 晃祐 (利根中央病院 整形外科)

【目的】今回我々は当院における大腿骨近位部骨折受傷例に対して深部静脈血栓 (以下 DVT) の術前スクリーニング検査のため、D-dimer 値の測定、下肢静脈超音波検査を行い、術前の DVT 合併の有無に関して比較検討を行った。【対象と方法】対象は 2011 年 5 月から 8 月に当院に入院した大腿骨近位部骨折患者のうち、術前に D-dimer 値の測定、下肢静脈超音波検査を行った男性 3 名、女性 21 名の計 24 例。手術の前日に D-dimer 値の測定、下肢静脈超音波検査を行い、超音波検査にて血栓を認めた際に DVT 陽性とした。【結果】受傷から検査までの平均日数は 7.0 日であり 24 例中 5 例 (約 21%) に DVT 陽性を認めた。発症部位は膝窩静脈より近位である近位型 3 例、膝窩静脈より遠位である遠位型 2 例であった。平均年齢は DVT 陽性例が 79 歳、陰性例が 82 歳、受傷から検査までの平均日数は DVT 陽性例が 6.8 日、陰性例が 7.0 日とどちらもほぼ同様であった。DVT 陽性であった 5 例はいずれも下肢腫脹などの血栓徴候は認められなかった。骨折型は全例大腿骨転子部骨折、5 例中 4 例に心血管系、脳血管系の合併症があった。また、2 例に受傷前の抗血小板剤の内服が認められた。【考察】大腿骨近位部骨折は受傷後より Virchow の 3 徴のすべてを満たしており、非常に血栓ができやすい骨折であると考えられ、術前の血栓の有無に関してのスクリーニングは重要と考えられる。大腿骨近位部骨折の受傷後平均 5 日に おける D-dimer のカットオフ値は $14\mu\text{g}/\text{mL}$ であったとの報告があるが、今回の我々の症例をカットオフ値 $14\mu\text{g}/\text{mL}$ で検討すると感度 0%、特異度 68% という結果になった。症例の置かれた条件が異なる場合は一律のカットオフ値の設定は困難であるといえるだろう。また、抗凝固療法中の患者に対する半年後の静脈造影検査にて 61% に血栓の部分残存及び拡大があったとの報告があるが、今回我々の調査でも心血管系、脳血管系などの基礎疾患に対する抗凝固薬内服歴があっても DVT の合併が認められた。抗凝固薬内服歴があっても無症候性の DVT 合併の危険性はあると認識するべきであろう。